HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	初心忘るべからず
Author(s)	篠原，修
Citation	アイヌの伝統を基層にした多文化な景観 ： 北海道平取地域の文化的景観に関する論説集，12-13
Issue Date	2024-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92880
Type	other
File Information	ronshu_biratori (8).pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

初心忘るべからず

篠原修
GS デザイン会議 代表

景観を旗印にデザインを昭和の終わりから始めて、40 年近くになる。初めは千葉県松戸の広場の橋で、以来橋梁、河川、ダムと続けて来て駅と駅前広場に至った。今だに駅には、長崎駅、名古屋駅、神戸の三宮駅に関わっている。北海道の仕事とはと言うと、昭和 41 年の紋別港実習以来のファン故に残念なのだが、極めて少なく、札幌の創成川と駅前通り、それに旭川。ここでは駅舎と忠別川の広場、鉄道高架に新神楽橋で 20 年以上通った。

出身が建築ではなく土木だったので、デザインの訓練は受けていない。だから、松戸の橋でも、続く島根県津和野の川でも、不安を抱えての恐る恐るの取り組みだった。現在、母校の東大土木では景観の講義もデザイン演習もやっているので、今の学生にそういう不安はないと思う。こうやって越し方を振り返ってみると、当初は思っても見なかった時代になった事に気付かされる。それは、時代は変化するという事である。

デザインを始めたのは昭和の終わりだったと述べたが、景観の勉強を始めたのはもっと早く、昭和 42 年の春だった。どういう時代だったかと言うと、東京オリンピックが昭和 39 年で、7、8 年後には札幌に届くという新幹線が開業したのも昭和 39 年だった。60 年近くも前の事です。筆者が学生だった頃に景観で、俗にいう飯を食っていたのは先輩で助手だった中村良夫さん、ただ 1 人だった。それが今ではどうだろう、大学に限っても、東北大、東大、早稲田、京大、立命館、九大などとなっていて、何人になるのか (残念ながら北大にはいない)。これに国交省、環境省、自治体、コンサルタント、設計事務所などを加えれば、何十人になるのか見当もつかない。これも、時代は変化するのだ、ということを示している。

以上に述べた、時代は変化するのだ、という事実から何を教訓とすべきか。随分前になるが、5、6 年下の後輩から次のように言われた事を思い出す。「こんなに隆盛になると思っていたら、やっていればよかった」、この本人は景観に見切りをつけて通産省に入ったのだった。もちろん彼の判断の方が正しく、常識にかなっている。だが、それが正しい道であるか、と言われれば違うと言わざるをいない。以上は景観に例をとっての話だが、変化するのは景観に限ったことではない。何事も変化から逃れることはできないのだ。戦前の陸軍とまでは言わないにしても、戦後の 70 年あまりにしても、花形の産業は戦後すぐの石炭から石油へ、更には今まさに電気へ、鉄道から高速道路へ、さらには航空へ、変化して来たのだ。これからもこのような変化は続くことだろう。

こういう避けられない変化を前にして、どう考えたら悔いのない途を歩めるのか。それは、初心忘るべからず、だと考えて来た。何故、景観の勉強を始めたのか、デザインに不安ながらも取り掛かった時に、何を大切だと考えたのか。時折初心に立ち戻って考える。

ここまで来て、それが平取に結びつくんですか、と疑問に思うかもしれない。だが、川州畑というアイヌの畑を見れば、それはまごうことない水田稲作を始める人間の初心だった事に気づくだろう。また、木の皮を剥いでアッツシを織る女性を見ていれば、それも機織りの初心だった事に思い至ろう。そう、平取に見られるアイヌの生活とその心は、我々

日本人の初心を現してくれているのである。生活するという事は何か、自然と付き合うという事は何かを示唆しているのである。

写真１　アットゥシ織りの高名な織手である貝澤雪子さんの工房

写真２　伝承者育成講座修了式での進藤さん親子
母が持つ木彫盆は息子の綾斗さんが制作
一方のアットゥシ衣装は千賀子さん制作
（工芸伝承館ウレシパで）

写真３･４　川洲畑は、川沿いで洪水がひいたあとの土砂堆積地を使い雑穀などを栽培する古い農法。肥料を用いず除草などの手間をあまりかけない。平取町のアイヌ文化環境保全対策事業では、実際にこの農法を経験・見聞した方々の指導を受けながら栽培試験を行ってきた。

※このページの写真と解説文は平取町アイヌ施策推進課による提供。